

Facebookを活用したワークショップの効果と課題

京丹後市五十河地域における取り組みを通じて

誌名	農村計画学会誌 = Journal of Rural Planning Association
ISSN	09129731
著者名	鬼塚,健一郎 萩原,和 星野,敏 清水,夏樹 橋本,禅
発行元	農村計画学会
巻/号	32巻4号
巻号補足	
掲載ページ	p. 507-516
発行年月	2014年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



Facebook を活用したワークショップの効果と課題

—京丹後市五十河地域における取り組みを通じて—

The effects and problems of workshop utilizing Facebook:

A case study of Ikaga region, Kyotango City

鬼塚 健一郎* 萩原 和** 星野 敏*** 清水 夏樹**** 橋本 禪***

Kenichirou ONITSUKA*, Kazu HAGIHARA**, Satoshi HOSHINO***, Natsuki SHIMIZU****, Shizuka HASHIMOTO***

(*京都大学大学院農学研究科 **滋賀県立大学地域共生センター ***京都大学大学院地球環境学堂

****京都大学森里海連環学教育ユニット)

(*Graduate School of Agriculture, Kyoto University, **Center for Community Co-design, The University of Shiga Prefecture

***Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University,

****Education Unit for Studies on Connectivity of Hilltop, Human and Ocean, Kyoto University)

I はじめに

ワークショップ（以降、WS）は、住民参加型あるいは住民主体型の地域計画づくりにおいて一般的に用いられる手法であり、農山村地域においても広く活用されている。通常では、地域住民等が、地域の解決すべき課題や地域にとって必要な施策等を、地図上に記入したり、KJ 法などの手法によりとりまとめたりしながら、集団によるアイデアの創造や合意形成をはかっていくプロセスをとるのが一般的である。行政や地域外の専門家などがファシリテーターや参加者として参加する場合も多いが、あくまで主体は住民である¹⁾。

農山村地域では、過疎化・高齢化・混住化による地域コミュニティ機能の弱体化により、地域単体での問題解決が難しくなっている。そのため、行政や NPO、大学、他地域、民間企業等をも含めた地域内外の多様な主体を計画づくりに取り込んでいくことの重要性が高まっている。それは、計画づくりのプロセスで導入される WS においても同様である。外部からの客観的な視点に基づく意見やアイデアにより、地域住民や行政のみでは得られない多様性のある質の高い議論が期待できる。地域外の主体の参加や継続的な議論の大きな障壁となるのが、農山村地域との時間的・空間的距離である。近隣であればまだしも、遠く離れた場所にいる人々を、地域の現場の議論に参加させることは、これまでは非常に困難であった。

ところが、近年世界的に普及しつつあるソーシャル・メディア²⁾は、空間的なハンディキャップを克服し、遠く離れた主体を結びつける機能を有しており、WS においてもその役割が期待される。ソーシ

ャル・メディアの中でも代表的なものが SNS (Social Networking Service) である。SNS では人と人とのつながりを促進することに主眼が置かれ、ネット上でコミュニケーションの場を自由に設定できる。総務省の平成 22 年度情報通信白書²⁾では、「ICT (Information and Communication Technology) による地域の活性化と絆の再生」の中で、地域コミュニティの強化を目的とした地域 SNS³⁾が大きく取り上げられた。現在世界最大の SNS は、10 億人以上のアクティブユーザーを抱える Facebook であり、実名による利用を特徴とし、我が国でも急速に普及しつつある³⁾。

このような状況を踏まえて、筆者らは、NPO 法人いのちの里京都村⁴⁾と共同で、京丹後市五十河地域において、「ビジネスクリエイター開発セミナー in 五十河（以降、セミナーと略記）」と称する民間企業の社員（以降、企業参加者）を対象とした研修セミナーを、2012 年 9 月 12～13 日に開催し、運営を行った⁵⁾。セミナーの主目的は、自然豊かな田舎において地域住民や大学等の様々な主体とともに都市農村協働型ビジネスの企画を作り上げる共同体験を通じて、ビジネスにも役立つ企画作成プロセスを身につけることにある。同時に、地域側にとっても、民間企業の企画力や専門家の意見を地域計画づくりに取り入れる機会となることを意図した。

本セミナーの中心となるのは、企画案を練り上げるために計 3 回に渡って実施した WS である。その取り組みの中で、Facebook を活用して農村計画の専門家や実務従事者、他地域の住民等（以上、外部参加者）が遠隔から議論に加わることを可能とし、専門的意見の取り込みによる議論や成果の質の向上を目的とした新たなしくみを導入した。さらに、WS を現場における議論のみに

留まらず、農山村地域と地域外とをつなぐ機会として拡張的に扱い、WSをきっかけとして、企業参加者と地域住民、外部参加者等の間のネットワークをFacebook上で形成し、議論や交流を維持することも目的とした。

本稿では、セミナーにおけるWSの取り組みの詳細を報告するとともに、特にFacebookの活用に着目して、Facebook上の投稿データや友人関係のネットワーク、参加者からの評価等を総合的に分析することで、特に①外部からの知恵や情報の取り込み効果、②WSによるネットワークの形成と議論や交流の維持効果の2点に着目して、効果の検証と課題の抽出を行う。

II WSにおけるSNSの可能性

本章では、WSが地域計画の分野でどのように導入されてきたか、あるいは如何なる形態のWSがあるのかについて先行研究を概観し、その上で、本報告で対象とするSNSを活用したWS手法の位置づけを整理したい。

まず、WSの歴史的変遷に目を向けると、鳴海ら³⁾の研究が挙げられる。具体的には、日本における住民参加型まちづくり論の変遷(1970年から1994年まで)を整理する中で、WS手法が「理論」から「実践」、さらには「評価」の過程にあることを提起した。彼らが提起したWS手法の「評価」に関連して、WS手法に関する類型化も行われている。黒岩ら⁴⁾は、WSによって期待される効果を6項目(「啓発」、「交流」、「学習・習得」、「情報収集」、「将来展望」、「合意形成」)によって評価し、まちづくり計画の策定内容によって、6項目のバランスが異なることを指摘している。

次に、WS手法そのものをテーマとしたものでは、大谷ら⁵⁾によるKJ法を用いた広域計画策定段階におけるWS手法の実践に関する研究や、渡辺・鎌田⁶⁾によるイラストを用いた住民合意形成についての考察などが挙げられる。いずれの場合も、イメージの可視化や共有化などにおけるWS運営の留意点が整理されており、一連の作業プロセスをどのように最適化すべきかについて議論されている。一方、こうしたWS手法について、新たなツールを導入することで改善を図ろうとする取り組みとして、田上ら⁷⁾や小瀬・岡部⁸⁾によるCGやGISの導入に関する研究等がみられる。専門家ではないWS参加者にとってもイメージを共有しやすい可視化ツールが求められており、そうしたツールを如何にWS手法に組み込むかについて多くの関心が払われている。

以上を踏まえると、近年のWSでは、「アイデアの創造」や「合意形成」以外にも「交流」や「学習・習得」など様々な効果が期待されているが、WS手法に関する取り

組みは、議論のサポートに関するものに留まっている。複合的な効果をもたらすような手法や、それをサポートするツールが求められているなかで、SNSには、テキストや画像データ等による議論の可視化・共有化に加えて、多様な主体との交流や議論の継続、学習効果等、様々な可能性が期待される。しかし、地域計画WSにおいてSNSが活用された例はこれまでに全くみられない。

III 対象地域

1 概要

筆者らは、京都府下の3つの農山村地域において、①地域内の情報共有、②地域外への情報発信・交流、③地域間連携を、統合的に促進させる情報システムと普及手法の開発を目的としたプロジェクト(SCOPEプロジェクト、総務省)に取り組んでおり、Facebookを地域住民の情報共有・情報発信の場として活用してきた。本研究で対象とする五十河地域は、SCOPEプロジェクトの3つの対象地域のうちの1つである。

五十河地域は京都府丹後半島の内陸に位置するが、宮津市や峰山町の市街地から車で15分ほどの距離にある。5つの集落からなる旧村にあたる地域であり、各集落の中心部の間の距離は、それぞれ3~5km程度離れている。京都府による地域活性化事業「共に育む命の里事業」^{注6)}の実施地域であり、平成21年度の事業資料によると、人口は5集落合計で521人、世帯数は193世帯で、高齢化率は41%となっている。セミナーの実施場所は、五十河地域中部にある古民家苑である(写真1)。古民家は江戸時代に建てられたもので、京都府各地から3棟、五十河地域に移築され、活用が検討されている。特産品としては、五十河米が特Aにランクされている。

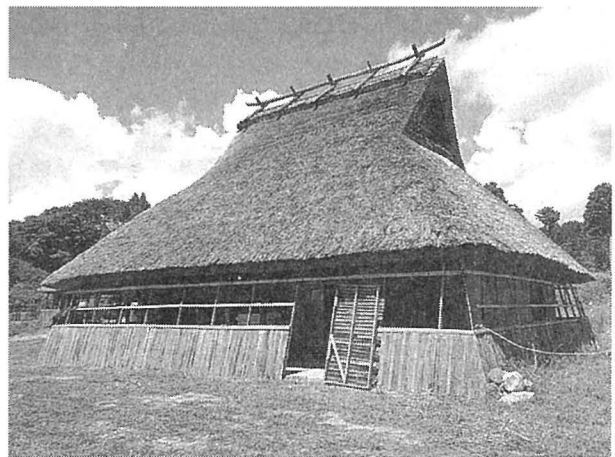


写真1 五十河地域の古民家苑
Picture 1 An old dwelling in Ikaga region

情報通信環境としては、NTT Docomo と Softbank についてはほぼ全域で使用可能であるが、au は一部ではつながりにくい。光ファイバー回線はほぼ全域で敷設されているが、セミナー実施場所である古民家苑では、光ファイバーはおろか固定電話回線も届いておらず、有線でのインターネットは全く利用できない状況であった。

2 五十河地域における ICT 活用の取り組み

筆者らは、SCOPE プロジェクトにおいて、セミナー以前に 3 回にわたって五十河地域で Facebook や iPad に関する講習会等の活動を行ってきた。よって、セミナー時点で五十河地域の関係者とはほぼ顔見知りであり、事前の打ち合わせなどはスムーズに運ぶことができた。セミナー時点で、五十河地域の関係者は基本的な Facebook の操作は行える状態であったが、SCOPE プロジェクト以前には Facebook の利用者は全くおらず、本セミナーにおける Facebook を活用した取り組みは、先行する活動があったことで成立したものであるといえる。

SCOPE プロジェクトでは、2011 年 12 月に、Facebook 上に、地域内部に限定して情報共有や連絡等を行うための場としてグループ^{注7)}、外部への情報発信の場として Facebook ページ^{注8)}を設置し、活用している。

IV 分析の概要

まず、次章では WS の取り組みの概要について整理する。続く VI 章では、WS における Facebook 活用に着目して分析を行い、効果や課題を検証する。Facebook の分析には、本セミナー専用で作成した Facebook のグループ（以降セミナー用グループ^{注9)}内の全投稿データ、友達関係データを利用する。投稿データの抽出は、Python^{注10)}によりスクリプトを開発して行った。分析の対象は、グループが作成された 2012 年 8 月 28 日から 12 月 1 日までのデータとした。分析は次の手順で行った。

- ①グループ内の投稿データの集計と分類
- ②全参加者の分類と整理
- ③外部参加者の参加状況や、現場と外部との間の議論に関する分析
- ④セミナー後の、セミナー用グループ・Facebook ページにおける参加者間の交流の継続効果に関する分析
- ⑤外部参加者の感想や意見の分析

V ワークショップ

1 WS の流れ

企業参加者は合計 15 名（男性 12 名、女性 3 名）であり、関西地方を中心に、イベント・ツアー企画会社、自然エネルギー関連会社、NPO 法人等、WS のテーマ（次節参照）に合致する企業・団体から参加があった。セミナーは 1 泊 2 日という期間に多くの要素を詰め込む形で行われた。WS に直接関連するプログラム項目を表 1 に示す。

1 日目は、WS での議論の事前準備として、地域について把握するために集落ウォーキングを行った。集落ウォーキングでは、事前に割り当てられたテーマごとに 4 班に分かれてそれぞれに深く関連する場所や地域住民の方々を訪問し、話を伺った。休憩を挟んで、五十河地域に伝わる小野小町の伝説について、地域の語り部の話を伺った。以上により、限られた時間ではあったが、地域の大まかな状況を掴むことを目指した。

WS は、1 日目に 1 回、2 日目に 2 回の計 3 回実施した。Facebook を通じて外部からの参加を呼びかけたのは 1 日目（WS ①）である。WS ①の時間内はいつでも参加可能としたが、外部参加者が長時間拘束されることに対する配慮として、特に 21:00～22:00 をコアタイムとして設定し、この期間について特に優先的に参加を呼びかけ、他の時間は自由に退出可能とした。2 日目（WS ②、③）も Facebook での実況は行い、外部からの参加も受け付けた。

各回の内容としては、WS ①では集落ウォーキング等で得た情報をもとに、課題を踏まえて地域づくりに関する様々なアイデアを出し合い、外部参加者からの意見も交えて多くの内容について議論を行った。WS ②では、前日に出た内容を KJ 法などにより整理し、計画案に収束させていく作業を行った。WS ③では、午後の成果発表会に向けて、模造紙に計画案をまとめる作業を行った。

表 1 WS に関連するプログラム項目

Table 1 The menu related to the WS

2012 年 9 月 12 日	
12:30～13:45	ウェルカムスピーチ、自己紹介、WS 説明
13:45～16:00	集落ウォーキング
16:20～16:45	小町伝説の語り部
20:00～22:30	WS ①
2012 年 9 月 13 日	
7:30～9:30	WS ②
10:00～12:00	WS ③
13:00～14:30	成果発表会

2 ワークショップの実施方法

事前段階で、運営側と地域住民とで協議し、WSで議論するテーマを設定した。五十河地域から、これまでの地域づくりの流れにより、「古民家苑をシンボルとする究極のエコ体験」をテーマとしてビジネス展開をしたいという強い希望があったため、古民家苑の活用を中心として次の4つのテーマを設定した。WSは、これらのテーマに基づいてフリーディスカッション形式で行われた。

- ①民家苑×経済
- ②民家苑×食
- ③民家苑×環境
- ④民家苑×教育

実施体制としては、運営側から各班についてファシリテーター1名、ICT専任スタッフ1名の計2名を割り当てた。企業参加者は各班に3名から4名を割り当てた。地域住民にも随時1～2名、各班に参加してもらった。

Facebook上に本セミナー用グループ、「ビジネスクリエイター開発セミナー 001 in 五十河」を作成し、セミナーの約1週間前に参加者に対して公開した。同時に、WSに外部参加者を募るため、京都府農村振興課や農村計画学会の会員等に対して広報活動を行うとともに^{注11)}、外部参加者にもグループへの事前参加の呼びかけを行った。事前にセミナー用グループを開放し、参加を呼びかけたのは、事前の交流によりある程度の自己紹介やアイスブレイキングを行うためであった。

セミナー用グループでは、五十河地域の概要や、これまでの地域づくり事業の取り組み内容を示す詳細資料15ファイルを公開しており、参加者が事前に地域の詳細を学習できるようにした。当日は、各班それぞれで議論を進行するための専用のスレッド^{注12)}を設定し、外部との議論はスレッドに対するコメント欄により行った。なお、セミナー用グループ上で行われた全ての議論は、グループ参加者であれば現在も閲覧可能である。

3 ICT機器の利用方法

現場と外部との間でコミュニケーションを実現するために各班で使用した機材は、ノートPC×1台、iPad2×1台、Wifiルーター×1台、プロジェクター×1台、その他接続用ケーブル類である。

会場である古民家苑には有線によるインターネット回線が一切無かったため、ネット環境はモバイルWifiルーターを利用した接続のみであった。回線スピードは最大7.2Mbpsの3G回線であり、動画によるリアルタイム実況中継や頻繁な画像アップロードが難しかったため、会場の議論をICT専任スタッフが適切なタイミングで

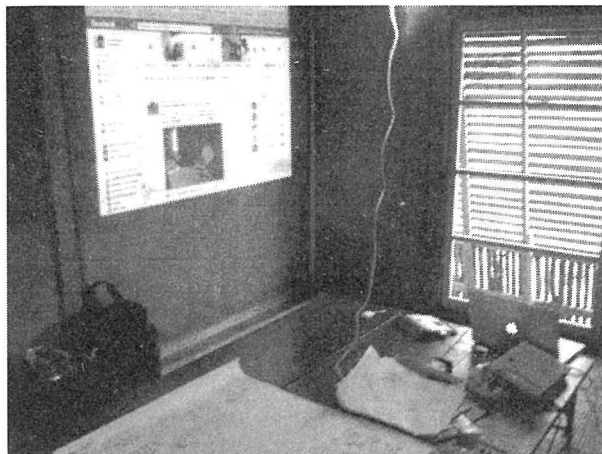


写真2 WS会場の様子

Picture 2 A setting of devices in the workshop room

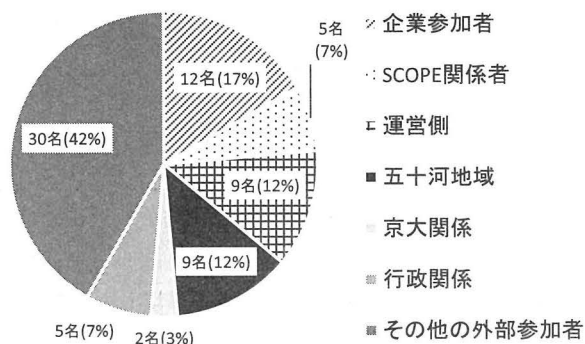


図1 セミナー用グループ参加者の内訳

Fig. 1 The categories of attendants of the seminar group on FB

要約し、テキストで実況する方法をとった。ICT専任スタッフは、Facebook通信用のノートPCとFacebook画面表示用のiPad2の2台を同時に操作する形となった。iPad2はプロジェクターに接続され、Facebook上での議論の状況が壁に投影された(写真2)。

VI WSの実態と効果に関する検証

1 全参加者の分類と整理

セミナー用グループには、2012年12月現在で計72名が参加していた。内訳は図1の通りである。企業参加者は、セミナー終了時点で15名中12名がグループに参加していた。SCOPE関係者とは、SCOPEプロジェクトに参加している他の2地域からの遠隔参加者である。五十河地域とは、五十河地域の住民であり、そのうち5名は現地でセミナーに直接関わっていた。運営側(筆者らを含む)は、現場でスタッフとして参加した京都大学とNPO法人いのちの里京都村のメンバーである。グループの全参加者のうち、現場にいたのは企業参加者全員、

表2 セミナー専用グループ内の投稿数

Table 2 The numbers of the posts on the seminar group on FB

	時期	プログラム項目	投稿数
前	8/28～9/11		14
中	9/12～9/13	挨拶から自己紹介まで	15
		集落ウォーキングから語り部まで	26
		食事からWS開始まで	6
		WS関連	28
後	9/14～12/1	昼食から成果発表会、終わりの挨拶まで	52
			11

運営側のうち8名、五十河地域のうち5名の計25名であった。外部参加者（京大関係、行政関係、その他の外部参加者の合計）は47名と、全体の半数以上を占めた。

2 セミナー用グループ内の投稿データの集計

セミナー用グループが開設されてから2012年12月1日現在までに行われた投稿は合計152件あった。セミナー前、セミナー中、セミナー後における投稿数は表2のとおりである。セミナー中はプログラムに沿って投稿が行われていたため、表2では、プログラム項目別に集計を行った。セミナー中2日間に127もの投稿が行われていたが、外部参加者から10件、五十河地域住民から2件以外はすべて運営側による投稿であった^{注13)}。

3 議論への参加状況と現場と外部の議論の一体性

本節では、第1日目のセミナー開催時に、班ごとにセミナー用グループ内に作成したスレッドのコメント欄による議論を分析し、当日の議論の状況と、議論が現場と外部との間でどの程度整合していたかを把握する。外部参加者が現場の状況を知る機会は、各班のICT専任スタッフによる現場からの投稿のみであり、議論の展開については、ICT専任スタッフによる投稿がきっかけとなる。そこで、現場からの投稿と外部からの投稿の経過を分析する。

まず、各班で行われた議論に対する外部参加者の参加状況を表3に示す。外部参加者のうち、議論に直接参加したのは47名中11名(23.4%)であった。②食班のみ、ネット接続にトラブルが発生したため途中からスタッフによる投稿が完全にストップし、終了後も40分ほど外部参加者のみで議論が継続された上、翌日も追加議論がみられたため、それらの合計となっている。また、コメントという形では参加していないが、投稿やコメントに対して「いいね」を行った外部参加者が他に3名みられた。議論の閲覧者は72名中63名(87.5%)おり、外部参加者47名のうち41名(87.2%)が議論を閲覧していた。

議論の主体となるコメント数をみると、全体で外部参加者のコメントが56.5%と、ICT専任スタッフよりも多くなっていた。これより、外部から積極的に参加が行

表3 ワークショップ外部参加者の参加状況

Table 3 The numbers of comments by attendants from distant places

ID	①経済	②食	③環境	④教育	合計
A	3	7	2	1	13
B	16	10	8	5	35
C	0	13	0	0	13
D	1	2	3	1	7
E	3	2	7	3	15
F	7	1	10	3	21
G	0	5	0	0	5
H	2	3	3	0	8
I	0	3	0	0	3
J	2	0	6	0	8
K	1	0	0	0	1
外部参加者 コメント数	35	47	39	13	134
スタッフ コメント数	44	13	14	32	103
総コメント数	79	60	53	45	237
外部参加者 比率(%)	44.3	78.3	73.6	28.9	56.5
外部参加者数	8	9	7	5	29

われたことがわかる。また、ほとんどの外部参加者は、一つの班のみではなく、複数の班の議論に参加していた。

外部参加者のコメント比率をみると、各班でばらつきがみられた。トラブルで現場からのコメントが途絶えた2班を除いて、外部参加者のコメント数とICT専任スタッフのコメント数との間でピアソンの相関係数を求めたところ、-0.26と有意な負の相関がみられた。ICT専任スタッフの積極的なコメントが外部参加者のコメントを誘引するような効果は必ずしも無いことが確認された。

次に、当日のFacebookを介した現場と外部との間の全やりとりを、セミナー用グループの投稿内容をもとに次頁表4に整理した。ただし、自己紹介や挨拶程度の議論に関係ないコメントは除外した。話題については1班と2班では6つに分類されたのに対して、3班と4班では3つのみであった。現場からの話題初出時や話題の切り替わり時には、数分以内にその話題に対する返答や議論が開始されていることがわかる。現場における議論を、ICT専用スタッフが内容を要約してコメントするまでのタイムラグが若干あるものの、外部からのリアクションは大きなタイムラグも無く行っていた。逆に、全班において、外部から初出の話題が提示され、それが現場で議論されるという展開がみられた。

現場からのコメント頻度の影響をみると、1班と4班では、現場からこまめにコメントされているのに対して、2班と3班では、10分以上現場からのコメントが途絶えている場合もあった。例えば2班における22:06～22:22、22:23以降では、外部参加者の間では活発な議論が継続されていたが、話題が一定していないことがわかる。3班における21:02～21:12でも、同様の傾向であった。一方で、現場から細かく情報が提供され

表4 各班における現場と外部との議論の経過（背景黒塗りは初出の話題）

Table 4 The process of the discussion of each group between the workshop place and distant places

(The cells with grey background mean the first comment of each topic)

1 班 (経済)			2 班 (食)			3 班 (環境)			4 班 (教育)		
時間	現場	外部	時間	現場	外部	時間	現場	外部	時間	現場	外部
20:31	雪		20:46~20:50	地料		20:34~20:36	民		20:43	知恵	
20:33	地域		20:58		地料	20:39	ツ		20:44	食育	
20:36~20:38	雪		21:01	地料		20:40		民	20:46~20:54	知恵	
20:41~20:44	地域		21:08~21:17		地料	20:43	ツ		20:54		知恵
20:44		雪	21:19	地料		20:45		ツ	20:57~21:17	食育	
20:46		地域	21:20	地料		20:45	ツ		21:18	知恵	
20:51	地域		21:26~21:28	米		20:46		ツ	21:19~21:21	食育	
20:55~21:11	民		21:33~21:34		米	20:51	ツ		21:20	知恵	
21:13		民	21:37	米		20:51~20:59		ツ	21:23	食育	
21:14	民		21:38		米	21:00	ツ		21:28		知恵
21:16		雪	21:53		地料	21:02		民	21:30~21:35	知恵	
21:19	民		21:54	地料		21:02		ツ	21:37		情報
21:21	雪		21:59		米	21:03		米	21:40		知恵
21:21		エネ	21:59~22:01		地料	21:04~21:06	ツ		21:43	知恵	
21:22		雪	22:05	米		21:09~21:11		米	21:43~21:46		情報
21:23	雪		22:06~22:09		地料	21:11		ツ	21:46	知恵	
21:26		雪	22:10		獣肉	21:12		米	21:48		知恵
21:26	雪		22:13~22:17		地料	21:13	米		21:50	知恵	
21:28~21:29		雪	22:19		米	21:15		ツ	21:52		情報
21:30	エネ		22:20		地料	21:15~21:18		米	21:52	知恵	
21:32		雪	22:22		米	21:20	ツ		22:04~22:07	情報	
21:35~21:36	エネ		22:22		獣肉	21:23~21:24		米	22:11		情報
21:36		エネ	22:23	獣肉		21:25		ツ			
21:39		雪	22:23		地料	21:26		米			
21:39	エネ		22:24~22:34		獣肉	21:27	ツ				
21:39~21:43		エネ	22:35		地料	21:30		米			
21:45	エネ		22:36		ツ	21:30		ツ			
21:46	雪		22:40		獣肉	21:33		米			
21:46	エネ		22:40~22:45		ツ	21:34~21:41		ツ			
21:48		エネ	22:46		獣肉	21:47~21:56	ツ				
21:48	エネ		22:50~22:58		ツ	21:59~22:00		ツ			
21:49		エネ	23:00~23:11		人材						
21:49		雪	7:35~8:35		民						
21:49		エネ									
21:50	雪										
21:50~21:53		雪									
21:55		エネ									
21:56	雪										
21:56		雪									
21:57~22:01		エネ									
22:01		雪									
22:03	ブナ										
22:03		エネ				1 班の話題			3 班の話題		
22:04	ブナ					雪：雪への対処と活用			民：民家苑設備		
22:05		ブナ				地域：地域の課題			ツ：ツーリズム		
22:05		エネ				民：民家苑の運営			米：五十河米		
22:05	エネ					エネ：エネルギー自給					
22:05		民				ブナ：ブナ林活用					
22:10	ブナ					健康：健康と婚活					
22:13	民					2 班の話題			4 班の話題		
22:15	民					地料：地元料理の活用			知恵：人と知恵の活用		
22:15		エネ				米：五十河米			食育：食育の衰退		
22:16		ブナ				獣肉：猪鹿肉の活用			情報：情報発信と共有		
22:18		エネ				ツ：ツーリズム					
22:22~22:24	健康					人材：地域住民人材					
22:25		ブナ				民：民家苑の課題					

ている1班と4班では、現場と外部における話題の一体性が強かった。

4 外部参加者がWSの成果に与える効果

Facebookによる外部からの有識者の参加によりWSの最終成果に与えられた効果を、外部からもたらされた話題・情報をもとに分析する。WSによる各班の最終成

表5 各班の最終成果概要

Table 5 The summaries of the final plan of each group

班	最終成果概要
① 経済	人生のステップを踏むための場所として「ステップフィールドいかが」というコンセプトを打ち立てた。具体的な内容は、クリーンエネルギー自給、美と癒しのツアーを行い、その収益により、五十河ソーシャル・ビジネスセンターを作り、人材育成や外部連携を通じて地域を活性化する活動を行うビジネスを作るものである。
② 食	地域の様々な食材（野菜）を活用して、「親子でつくる江戸時代グルメ」や「作って食べて！ 麗し料理教室」というコンセプトでイベント・ツアーを企画した。
③ 環境	五十河地域を維持していくために、地域の人材を確保するための、「五十河イルミネーション民家苑」と称するツアーイベントを企画した。主にカップルを対象としたこのツアーを通じて五十河をかけがえの無い地域とすることで、定住者を増やそうという案である。
④ 教育	「五十河食・学民家苑～おばあちゃんの知恵袋～」というコンセプトで、地域の食の名人を発掘し、料理学校や食学ツアー等で様々な教育活動をビジネス化する。

果の概要を表5に示す。

第1班では、外部から提供されたクリーンエネルギーに関する話題が成果の一つとして入っているが、長く外部と議論された雪やブナ林関連の内容は含まれていなかった。第2班では、外部から提供されたツーリズムを柱として、地元料理や五十河米を活用する内容が最終成果に取り入れられている。一方で、外部からの獣肉関連の内容は含まれていなかった。第3班では、外部から提供された五十河米に関する話題が長い間話題に上ったが、最終成果には含まれていなかった。第4班では、外部から提供された情報発信に関する話題は最終成果には含まれていなかったが、活発に議論されていた知恵の活用については中心コンセプトとなっている。以上のように、外部からもたらされた話題が最終成果に入っているかどうかについては、2班ずつに2分される結果となった。なお、最終成果に含まれなかった話題については、2日目に現地中心で成果をまとめていく際の各班の方向性に合わなかったことが外れた原因と考えられ、内容やレベルについては、特に問題は感じられなかった。

5 ネットワークの形成と維持・継続効果

本節では、WSをきっかけとしたネットワークの形成や、WS後のネットワークの維持・継続効果について分析を行う。表2に示したように、セミナー用グループにおけるセミナー後の投稿・コメントは少なく、内容も事後の連絡や挨拶、紹介等が中心であった。

一方で、セミナー用グループには、五十河地域のFacebookページの紹介文が記載されており、セミナー専用グループ参加者のうち、五十河地域のFacebookページのファン数は、72名中39名（54.1%）に上った。そのうち、アナウンスしていないにも関わらず、本セミ

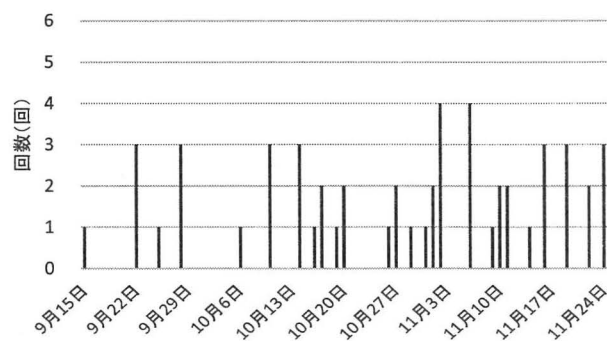


図2 五十河 FB ページにおける交流の継続

Fig. 2 The continuous communication on the Ikaga FB Page

ナーをきっかけとして新たにファンになった人が8名（20.5%）みられた。Facebook ページでは地域の情報が活発に投稿されており、これら8名は、セミナー終了後も継続して五十河地域の状況を把握可能である。また、8名の持つ友達の合計数は1,293名にも上り、これら8名の「いいね」やコメント等の行動は、それらの友達にも伝わる可能性があり^{注14)}、五十河地域のFacebook ページの知名度・ファン数の大きな向上が期待される。

五十河地域のFacebook ページ上のやりとりをみると、セミナー開催以降に新たなファン8名中6名が「いいね」を行っていたのに対して、コメントをしていたのは2名のみであった。時系列に整理したところ、コンスタントに「いいね」やコメントが得られており、徐々に活発化傾向にあることがわかった（図2）。

続いて、セミナー後2012年12月1日現在におけるセミナー用グループの全参加者のネットワークをみるため、Facebook 上の友達関係に基づいてネットワーク図を描画した（次頁図3）。中央部の密度の濃い部分は運営者側と五十河地域、SCOPE プロジェクト関係者が多いのに対して、周辺部に企業参加者（左上）、外部参加者（主に右）が位置する形となった。セミナーを通じて、運営者側や五十河地域住民と、企業参加者や外部参加者との間には自発的なつながりが生まれていることが窺えた。

6 外部参加者からの意見・感想

セミナー後に、外部参加者に対して、セミナー用グループ上で、Facebook を活用した取り組みに関する感想や意見を募り、5名から回答を得た。そのうち1名は現地で参加できなかった地域住民で、残りの4名は、WS時に外部から積極的に発言していた外部参加者であり、農村計画や関連実務に関わっている専門家であった。感想や意見を次頁表6に整理した（表中のIDは表3のIDに対応）。良かった点として以下の4点が挙げられる。

公開したが、アナウンスが曖昧だったため、企業参加者の事前参加は約半数に留まった。

②①と関連して、事前にセミナー用グループ上で配布した五十河地域の詳細資料についても、読み込んでいる企業参加者は少数であった。

③セミナー終了後に Facebook 上での議論の継続を意図していたが、セミナー用グループにおける地域住民の投稿が少なく、あまり活性化していない。

一方で、セミナー終了後に、企業参加者に対して簡易アンケートを実施したところ、「Facebook による外部との共同作業」に対する全 15 名による 5 段階評価の平均点は 4.00 と、高い評価が得られた。自由回答欄でも、Facebook の活用はよく機能していたという回答が複数得られていた。運営側の NPO 法人いのちの里京都村も、大きな可能性のある取り組みであり、今後、他の地域でも継続していきたいと総括している。

Ⅶ まとめ

本稿では、五十河地域で実施された Facebook を活用した WS の取り組みについて報告するとともに、その効果について、Facebook 上のデータや参加者からの評価をもとに検証を行った。その結果、企業参加者や外部参加者からポジティブな評価が多数得られ、運営側としても、今後に向けて大きな期待を持てる結果となった。以降では、特に注目していた①現場の議論に対する外部からの意見の取り込み、②ネットワークの形成・維持について整理し、効果と課題について考察を行う。

1 現場の議論に対する外部からの意見の取り込み

議論には、外部からも活発な参加がみられた。議論に直接参加した外部参加者は 23.4% おり、ほとんどの外部参加者は議論を閲覧していた。また、外部からも話題が積極的に提供され、最終成果に対する効果も確認された。現場に来られない多様な主体の客観的・専門的な意見やアイデアが、現場の議論を多彩なものとし、質を向上させる効果は得られたと考えられる。

一方で、議論への参加者が一部に限定された理由としては、まず、WS の雰囲気慣れていない場合、議論に入るのに抵抗があったことが考えられる。活発に議論に参加した外部参加者のほとんどが地域づくりに対する専門的知識や経験を備えていたことが、他の外部参加者にとっては抵抗要因となったことも考えられる。Facebook に対する習熟度も影響した可能性がある。また、現場の雰囲気がテキストのみの実況ではわかりにくかったという指摘もあり、ネット回線に不安が強かった

ものの、少なくとも最初に全ての班において現場や参加者の画像の投稿を行うことは義務とすべきであった。その他の反省点として、多くの参加者は事前に資料を読んでもおらず、情報の事前周知の方法に課題が残った。議論の過程では、現場からの情報発信の頻度が外部からの投稿数や議論の安定性に影響を与えることが示唆された。テキストによる議論では、現場からの投稿タイミングや投稿頻度、要約の程度等について最適な方法を確立する必要がある。

2 WS をきっかけとしたネットワークの形成・維持

セミナー用グループでは、現地での参加者を大幅に超える計 72 名の参加があり、多くはそこで初めて交流を持つこととなった。Facebook 上では、地域のネットワーク拡大効果や交流の継続効果が確認された。このように、ネットワークが拡張されることで、広報効果や、居住地によらない議論の継続効果により、多彩な人々の意見を地域づくりに取り入れる機会が増すことが期待される。

つながりの形成や維持について効果が確認された反面、セミナー後に、セミナー用グループにおける追加議論や交流は、ほとんど活性化しなかった。その理由として、地元住民の投稿がセミナー前後ともにほとんどみられなかったことが、大きな要因として挙げられた。五十河地域では、SCOPE プロジェクトにおいても Facebook の活発な利用者が一部に限られており、Facebook に対する習熟度や積極性が不足していたことや、多くの見知らぬ専門家との交流を躊躇したことが原因として考えられる。地域住民に対するメリットや効果の認知向上や、技術的なサポートも今後の重要な課題である。

Ⅷ おわりに

本報告における Facebook を活用した WS の取り組みは萌芽的なチャレンジであり、通信環境が乏しかったにも関わらず、効果や好意的な評価が得られた。通信環境が不十分な他の農山村地域においても実施可能であり、さらに多くの応用可能性が残されている。通信環境がより整備されている地域では、動画や音声による実況中継やリアルタイムのファイル共有など、他にも WS における ICT 活用の可能性は考えられる。また、地域住民のみならず農村計画の専門家にとっても、離れた地域での取り組みに参加することで多くの事例に関わり、多くの関係者との間で知識や情報を交換する新たな機会が得られ、後の業務や研究に活用できる。今後、さらなる事

例を通じて様々な手法が比較検討されることが望まれる。

謝辞

この研修セミナーは、京都府（農村振興課）と京の田舎ぐらし・ふるさとセンター（事務局：京都府農業会議）が企画した「交流体験・研修ビジネス」のテストケースとして実施されたものである。同企画の実施にあたり、菱川貞義氏（NPO法人いのちの里京都村）、高橋茂氏（NPO法人グリーンライフ丹後）、平尾幸一氏（京都府農業会議）、住谷康生氏（京都府）、そして外部参加者としてご参加いただいた柚山義人氏（農村工学研究所）ほかの皆様に感謝申し上げます。なお、本研究の一部に、総務省戦略的情報通信研究開発推進制度（SCOPE）（112307007）の助成を用いたことを付記する。

注

- 注1) 個人による情報発信や個人間のコミュニケーション、人と人との結びつきを利用した情報流通など社会的な要素を含んだメディア。
- 注2) ソーシャル・キャピタルや社会ネットワーク理論にもとづいて、地域コミュニティのつながりの強化を目的として特定の地域で運用されるSNS。
- 注3) 2012年12月現在、日本国内のユーザー数は1,600万人以上と言われている。
- 注4) NPO法人いのちの里京都村のホームページ〈<http://kyotomura.jp/>〉
- 注5) 現地における参加者は交流促進のため、9月12日の夜は3棟の古民家に数名ずつ分かれて宿泊した。
- 注6) 農山村地域の再生と持続的発展を支援する京都府の事業。旧村や小学校区等による複数集落の連携を深めるとともに、ハード・ソフトの両面から支援を行う。〈<http://www.pref.kyoto.jp/inochinosato/>〉
- 注7) 限定されたメンバーのみによる交流の場。
- 注8) 五十河地域のFacebookページ〈<http://www.facebook.com/ikaga.komachi>〉
- 注9) セミナー以前よりSCOPEプロジェクトを通じて五十河地域で作成されていたグループとは別物。以降、「グループ」という用語はすべて本セミナー専用で作成されたセミナー用グループを指す。
- 注10) オープンソースでコンパイルの不要な汎用スクリプト言語。ほとんどすべてのOSで利用可能。
- 注11) 都市農村協働ビジネスに関して豊富な経験や知識を持つ

専門家や実務経験者に、現場の議論に対してアドバイスをしてもらうようにお願いをした。

- 注12) セミナー専用グループ内で議論を行うために行った投稿のこと。Facebookでは通常スレッドという呼び方はしないが、便宜的に用いた。
- 注13) ここでいう投稿とは、Facebook上の独立した投稿のみを指す。議論の中心となる、投稿に対するコメントは運営側以外からも多く得られている。
- 注14) Facebookでは、ユーザーの「いいね」やコメント等の行動がその友達にも通知されることで、情報が広く伝達されるしくみになっている。
- 注15) 社会ネットワーク分析においてあるノードが他のノードをつなげる程度を示す中心性指標の一つ。

引用文献

- 1) 木下勇 (2007)：「ワークショップ 住民主体のまちづくりへの方法論」，学芸出版社。
- 2) 総務省：平成22年版 情報通信白書。
- 3) 鳴海邦碩・久隆浩・田中晃代・中沢篤志 (1995)：日本における住民参加型まちづくり論の年代別比較・考察 (1970～94)，日本建築学会近畿支部研究報告集，計画系 (35)，pp.733-736。
- 4) 黒岩麗子・藤本信義・三橋伸夫 (2002)：住民参加型地域振興の類型からみたワークショップ手法の特徴：計画策定プロセスからの考察，農村計画学会誌 (21)，pp.145-150。
- 5) 大谷英人・有元和哉・武内俊樹・田村幸士・前田佳子・山口博之 (2003)：広域計画策定段階におけるワークショップ手法の実践と課題～高知広域都市計画区域マスタープラン検討委員会まちづくりワークショップを事例として～：その2 KJラベルを用いた広域課題抽出ワークショップの設計と実践，日本建築学会四国支部研究報告集 (3)，pp.47-48。
- 6) 渡辺正樹・鎌田元弘 (2002)：イラストを用いた住民合意形成について：千葉県船橋市の海老川調節池を事例として，日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2 分冊，pp.751-752。
- 7) 田上恭也・大畑浩介・有馬隆文 (2005)：空間理解とイメージ共有のためのワークショップ支援 VR システムの開発，日本建築学会九州支部研究報告 3，計画系 (44)，pp.421-424。
- 8) 小瀬博之・岡部琢真 (2004)：ワークショップにおけるアンケートと Web によるアンケートの市民意見の比較：(仮称) 川越市森林公園計画におけるケーススタディ，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1 分冊，pp.793-794。

Summary: In this article, we introduced a new way of workshop utilizing Facebook. We hosted a seminar called "Business Creator Developing Seminar" with the NPO group "Kyotomura" in Ikaga region, Kyotango city on September 12-13, 2012 and had 3 workshops in the seminar utilizing Facebook both to make interactive communication with various kinds of distant people with specialties in rural planning and to keep the connection created in this workshop. We analyzed the effects and problems of the workshops utilizing Facebook and discussed the possibilities and rooms to be improved in this way of workshop in the future.

キーワード (Key words)：ワークショップ (Workshop)，ICT (ICT)，インターネット (Internet)，Facebook (Facebook)，社会ネットワーク分析 (Social Network Analysis)

(2013年5月16日 原稿受理)
(2013年12月5日 採用決定)